

平成 24 年度
横須賀美術館 評価報告書
(二次評価まとめ)

平成 25 年（2013 年）6 月
横須賀美術館運営評価委員会

I 美術を通じた交流を促進する

【集客・交流推進】

① 広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる。 [広報]

		(23年度)	1次評価	2次評価
達成目標	・年間観覧者数103,000人	A	B	
小林委員長	B	達成目標を下回ったが、経済部の企画を切り離し、美術館の企画に限定した点は評価できる。		
柏木委員	B	<ul style="list-style-type: none"> ・横須賀市の人口に鑑み、約10万人の来館者目標は、決して容易な設定値ではないと思います。 ・日本の洋画の展覧会は、概して、来館者を獲得できない傾向(全国的に)にあります。 ・経済部が主体となったイベントについては、館の経営・ミッション両面で、評価分析をするべきと考えます。 		
菊池委員	B	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館としての特別企画展の位置づけにより、評価は変化する。現段階では1次評価と同様とする。 ただし、特別企画展の位置づけの明確化は、今後の当美術館の性格づけや運営面でも重要な課題と考える。 		
久保委員	B			
黒岩委員	B	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、経済部特別企画展の影響で、企画展の開催日数が少ないことを考慮すると妥当な数字だと考えられる。 ・リピーターの割合が46.6%と半分近い値なのは、美術館としての存在が広く認知されてきたと考えられる。 ・市内居住者の割合が40.6%と安定しているのは、市民の美術館という意識が定着してきたと考えられる。 		
小島委員	B	特別企画展「70'sバイブレーション」の入場者数は少なかったが、アンケート結果からみて40代、50代の男性観覧者の割合が高いことから、1ヶ月の会期で来館可能日が週末に限られてくることが要因の一つとして考えられる。		
原田委員	B			

実施目標	・広報、パブリシティ活動を通じて、市内外の広い層に美術館の魅力をアピールする。	(23年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A	パブリシティの活動に関しては美術館の努力を評価することができる。気になる点は、美術系雑誌の掲載件数が平成24年度になって大幅に減少したことである。何故なのか、・・・美術館の展示企画と関係しているのか。		
柏木委員	A	・市民の来館者が増えていること、リピーターが増加傾向にあることは、これまでの広報周知が一定の効果を挙げつつあることを示していると考えます。		
菊池委員	A	・露出度の向上、掲載のタイミング、メリハリ等、広報プロモーションは年々精度が上がっている。		
久保委員	A			
黒岩委員	A	・情報掲載数が目標を達成したことは評価できるが、初来館者の割合が53.4%と減少傾向にあることは課題である。 ・認知手段のトップが学校へのちらし配布である。今後も継続して行ってほしい。		
小島委員	A	ポスティングでの広報活動は、場合によってはクレームの対象になりえるので控えた方がよいと思う。		
原田委員	A			

②市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。

[市民協働]

達成目標		(23年度)	1次評価	2次評価
		A	S	
達成目標	・市民ボランティア協働事業への参加者数のべ1,400人 (事業ごとに加算、登録者・一般参加者を総合して)		A	S
小林委員長	S	学芸員をはじめ美術館関係者の努力を評価したい。この領域の課題は今後の美術館活動や運営を考えるにあたって重要な点になる。		
柏木委員	S	・ボランティアの活動に対する満足度も評価にあたって勘案すべきかと思えます。		
菊池委員	S	・ボランティアの増加は、運営面で大変心強い応援団となる。特に、一般参加者の増加はボランティアへの参加誘導の成果と考える。量だけではなく、質の面でも努力がみられる。		
久保委員	S			
黒岩委員	S	一般参加者数が大きく伸びていることは評価できる。より一層の内容の充実と回数の増加等、次年度に生かしたい。		
小島委員	S	プロジェクト、サポートボランティアは年齢の制約があるのか。高校生でも登録、一般参加が可能か。		
原田委員	A			

実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ふだん美術館に関心を持たない層を含めた市民が、美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。 ・市民ボランティアが、やりがいを持っていきいきと活動できる場を提供する。 	(23年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A	横須賀美術館の実施目標とした姿勢は今後とも培うべき課題である。横須賀美術館のこれまでのボランティアへの対応を高く評価している。		
柏木委員	A			
菊池委員	S	息の長い市民協働のあり方として、さらに興味深い演出やボランティアへの還元メニューなどモチベーションの充実に尽力願いたい。		
久保委員	A			
黒岩委員	A	ボランティアの企画したイベントが地域行事として定着している点とボランティア登録者が増えている点は評価できる。		
小島委員	A	サポートボランティアが研修の一環として作家のアトリエを訪問できたことは、大きな収穫となったのではないかと。		
原田委員	A			

Ⅱ 美術に対する理解と親しみを深める

【社会教育】

③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。

〔展覧会・教育普及〕

達成目標	・企画展の満足度(補正值)70%	(23年度)	1次評価	2次評価
		A	A	
小林委員長	A	「ストラスパール美術館展」や「女性の情景展」といった展示が、市民や女性に満足感を与え、達成目標の70%を大きく上回ったことについては評価できる。ただ、70%という割合の根拠については過去の数字だけでよいのかどうかといった課題は残る。		
柏木委員	A	・アンケートによる満足度の算出方法を明示されるべきかと考えます。		
菊池委員	A	学芸員の方々が、最も手応えを感じる目標値ではないか。ますます、充実(90%超)に向け尽力願います。		
久保委員	A			
黒岩委員	A	企画展の満足度が、昨年度から微増の80.9%あることは評価できる。		
小島委員	A	企画展の満足度の指針は美術館運営の根幹を成すもので、全体的な満足度のみでなく、展示作品数の妥当性、クオリティの高さなどの調査も意識すべきではないか。		
原田委員	A			

実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間6本(児童生徒造形作品展を含む)の企画展を開催する。 ・所蔵品展・谷内六郎展を年間4本開催する。 ・大人の知的好奇心を満たし、美術への理解を深めるための教育普及事業を企画・実施する。 ・所蔵図書資料を充実させる。 ・多くの人が気軽に利用できるよう、図書室の環境を整える。 ・主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。 	(23年度)	1次評価	2次評価
				A
小林委員長	A	横須賀市や横須賀美術館の立地性を考え、満足のいく企画展の外にも、美術への理解を深める教育普及事業の企画も必要である。		
柏木委員	A	・独自の視点に基づくテーマ展の立案や、ゆかりのアーティストの掘り起し、市内他施設との連携など、意欲的な取り組みが見られました。		
菊池委員	A	学生ボランティアなどの参画を促し、出口調査など、来館者の負担にならない程度のヒアリングなども有効では。		
久保委員	A			
黒岩委員	A	年間6本の企画展に特色をもたせると共に、内容に応じて音声ガイドや鑑賞ガイドを用意し知的好奇心を満足させている。		
小島委員	A	展覧会関連のワークショップ「挑戦！ 英語で美術鑑賞」は興味深い企画で、個人で海外の美術館を鑑賞する際に役立つ。		
原田委員	A			

④学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する。 〔若年層への教育普及〕

		(23年度)	1次評価	2次評価
達成目標	・中学生以下の年間観覧者数15,000人	S	A	
小林委員長	A	横須賀市の立地性を考え、子供の教育施設としての美術館の在り方も重要であり、その意味では、実施目標と関連しての計画は十分に実施されていると言える。		
柏木委員	A	・経済部主導のイベント実施に伴い、所蔵品展を閉室したことに対する学校団体からの厳しい指摘の意味を熟慮し、美術館の本来のミッションと来訪者誘致の在り方を再確認すべきかと思われます。		
菊池委員	S	本テーマへの対応には、新たな取り組みも見られ生徒や園児の視線を考慮した努力が感じられる。		
久保委員	A			
黒岩委員	A	数値目標を達成したことは評価できる。前年度に比べ小中学生の観覧者数が減少したことは課題である。		
小島委員	A	学校、学年単位での観覧者数のみにとらわれるのではなく、本来美術に関心のある中学、高校の美術部員達を招き、じっくりと鑑賞できる場を提供することが、彼らの今後の部活動における作品製作の参考になると思われる。		
原田委員	A			

実施目標			(23年度)	1次評価	2次評価
			A	A	
小林委員長	A				
柏木委員	A				
菊池委員	S	学校との緊密な連携が定着している感がある。さらに、学校教育から派生してクラブ活動との連携など、鑑賞教育だけでなく美術館が実践を学ぶ場へと、幅広い教育施設として模索はできないか。			
久保委員	A				
黒岩委員	A	幼・保・小・中学校と美術館との連携した取り組みが、積極的に進められている点は大いに評価できる。			
小島委員	A	学校を通じ子ども達に美術館来訪についての感想文を書いてもらい、美術館の全体的な印象、作品鑑賞の感想などを把握できれば、子ども達への美術教育活動への取り組みに活かすことができると思われる。			
原田委員	A				

⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する。

[収集管理]

		(23年度)	1次評価	2次評価
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・収集方針に基づき、主体性を持って積極的な収集活動を行う。 ・適正な保管環境を維持し、そのチェックのため必要な調査を実施する。 ・計画的に所蔵作品の修復、額装を行う。 ・所蔵作品がひろく価値を認められ、他の美術館等で開催する企画展などに活用されている。 	C	C	
小林委員長	C	作品の購入予算がないことが、実施目標の達成に至らない大きな要因になっていることは、美術館としては重要な問題を包含していることになる。		
柏木委員	C	<ul style="list-style-type: none"> ・所蔵作品管理、作品収集に関する美術館としての取組みは過不足ないと思います。作品購入費の財源確保については、美術館も努力する必要がありますが、まずは、美術館の設置者で所蔵品の所有者である横須賀市の政策判断になると思います。その意味で、2次評価はFとすべき側面もあると考えます。 ・美術品の購入が途絶えると、優れた美術品の情報が集まらなくなり、将来的な美術館活動に影響する懸念が強くあります。 		
菊池委員	F			
久保委員	F	収集を寄贈のみに頼っている現状では収集活動にも限りがあり、判定不能とせざるを得ない。		
黒岩委員	C	作品購入予算がつかない中では、C評価が妥当だと考える。		
小島委員	C	横須賀の姉妹都市に美術館活動に関しても協力を仰ぎ、互いの所蔵作品を期間を定めて交換展示する。		
原田委員	C			

Ⅲ訪れるすべての人にやすらぎの場を提供する

【運営・管理】

⑥利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する。

[メンテナンス・来館者サービス]

達成目標		(23年度)	1次評価	2次評価
		B	B	
小林委員長	B	過去の数字から割り出されたものであるが、90%以上という満足度の設定がどのようなものか検討の余地があるように思える。		
柏木委員	B	・経済部主導のイベントなど、来館者が増える事業を実施する場合は、当該事業でアメニティ確保のための必要経費の予算化が不可欠と考えます。		
菊池委員	B	・特別企画展の影響とあるが、平常時の満足度との比較など、明確な検証ができているか。 ・集客施設は、来館者の増減にかかわらずどのような場面でも、満足していただける対応を心がけることが使命となる。 ・スタッフ対応度のアンケート結果検証に対するコメントがない。(項目が少ないため?)		
久保委員	B			
黒岩委員	B			
小島委員	B	エントランス脇の化粧室が混み合っている時は、図書室の化粧室の利用も案内する。		
原田委員	B			

		(23年度)	1次評価	2次評価
実施目標	<ul style="list-style-type: none"> ・建築のイメージを損なわないよう、じゅうぶんなメンテナンス、館内清掃を行う。 ・受託事業者と協力して、ホスピタリティのある来館者サービスを実践する。 ・受託事業者と協力して、付帯施設(レストランおよびミュージアムショップ)を来館者ニーズに応じて運営する。 	B	B	
小林委員長	B			
柏木委員	B			
菊池委員	C	<p>・ハード面の改善は、資金面等で止むを得ないが、人的(スタッフ)対応については即時改善が可能である。いろいろ努力の跡が見えるが、やはり来館者がどう感じているかをつぶさに把握する方策を全員で検討し、スピード感を持って改善することが、ファンを増やすことにつながると思う。</p>		
久保委員	B			
黒岩委員	B			
小島委員	B	<p>要所に花やグリーンが置かれていると、安らぎ感が得られると思う。</p>		
原田委員	B			

⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整える。

[バリアフリー]

		(23年度)	1次評価	2次評価
達成目標	・福祉関連事業への参加者数のべ400人	B	C	
小林委員長	C			
柏木委員	C	・神奈川県ライトセンターなどとの連携は取り組まれていますでしょうか。		
菊池委員	C	・計画段階での課題なのか、結果として成果が上がらなかったのかが、理解できない。現段階では一時評価と同様とする。		
久保委員	B	パフォーマンスの参加者以外はほぼ毎年安定しており、この項目の増減のみで評価が左右されるべきではないと考える。		
黒岩委員	C	福祉パフォーマンスの参加者が少なかった点については、来年度に向けて内容の検討が必要である。		
小島委員	C	障害者や高齢者は体調管理が難しい方もおり、福祉関連事業の開催時期は外出するのに適した気候の良い季節の実施を増やすことも考慮してみてはいかがか。		
原田委員	C			

実施目標		(23年度)	1次評価	2次評価
			B	A
実施目標		<ul style="list-style-type: none"> ・年齢や障害の有無などにかかわらず、美術に親しんでもらう(環境づくりの)ための各種事業を行う。 ・必要に応じて、対話鑑賞等の人的サポートを実践する。 		
小林委員長	A	<p>公立美術館の課題として、障害の有無に係わらず美術を楽しむ環境づくりは、今後とも重要な課題である。達成目標とは別に実施目標に対話鑑賞等の人的サポートの導入は評価したい。</p>		
柏木委員	A			
菊池委員	B	<ul style="list-style-type: none"> ・量(達成目標)としては伸びなかったが、質としてはある程度充実していたということなのか? ・障がい者と健常者が自然に場を共有できる雰囲気演出する努力がうかがえる。 		
久保委員	B			
黒岩委員	A	<p>各種事業内容の充実と共に「蝕察体験」の実施など、新たな試みが行われている。</p>		
小島委員	A	<p>高齢者ホームでの生活者のレクリエーションの一環として、美術館を来訪してもらえるよう、「敬老の日」の無料招待を検討してみたい。</p>		
原田委員	A			

⑧事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する。 〔経営的視点〕

		(23年度)	1次評価	2次評価
達成目標	・美術館全体で年間に使用する電力量を前年比△5%とする。	A	C	
小林委員長	C			
柏木委員	C	・適切な保存環境を必要とする美術品を収蔵し、来館者を心地よく迎えることが不可欠である施設の特性に鑑み、他律的要因に左右される電力消費量の定量的削減を達成目標とすることの是非が検討されるべきかと思います。私見では、「非」です。		
菊池委員	B	・達成目標については、「経年比較すると限界が来るので、震災の前年度を基準とすることが妥当」などと、見直しを求めた記憶があるが…。		
久保委員	C	電気の使用量、料金を見ればC評価となるが、来館者数やイベント、気候にも影響されるので、この項目だけで評価するのは難しい。		
黒岩委員	C	社会教育施設として、最低限必要な電力量をめやすとして、目標設定する必要がある。		
小島委員	C	年間の電力使用実績に基づいて、東京電力の最適料金プランの見直しのため、電力会社に契約プランのアドバイスを受けた方が良い。		
原田委員	B			

		(23年度)	1次評価	2次評価
実施目標	・職員すべてが費用対効果を常に意識し、効率的な支出を行う。	B	B	
小林委員長	B			
柏木委員	A	・各事業に人的資源がどれだけ投入されているか、すなわち、職員や臨時職員等の人件費がどれだけ投下されて事業が実現できているのか、という視点を持ちつつ、事業によっては、費用対効果のみで評価されることがないように留意すべきと考えます。		
菊池委員	B	・日常的にコスト意識が芽生えることが大切であり、一步步努力がうかがえる。引き続き効果検証し、全員が手応えを共有できるよう成果を可視化する努力を期待する。		
久保委員	F	電気以外の具体的な指標がないので評価はできない。		
黒岩委員	B			
小島委員	B	競争入札は大いに活用すべきだと思う。		
原田委員	A			